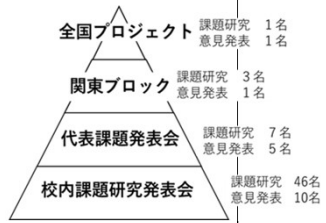




番号	重点方針	現 状	評価項目	取組内容	経過・実績(3月末)	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見(R7年2回目)
				<b>イ 実習等におけるリスク管理意識向上</b> (ア) 校内における農作業事故 0件 <b>※令和6年度農作業事故 1件</b>  <b>【職員向け】</b> (イ) ヒヤリハット事例の共有化 随時  (ウ)刈払機安全研修 1回 (エ) 農作業安全指導者研修 3名  <b>【学生向け】</b> (オ) 刈払機の安全衛生教育(森林) 1回 (カ) 伐木等の特別教育(森林) 1回  (キ) 農業機械研修 3回	(ア) 校内における農作業事故 2件 a 鉋による左手人差し指の切削(全治5週間)。切削手袋未着用(ゴム製手袋を着用)。 b トラクター免許研修中にトラクター同士の追突事故(停車中のトラクターに後続のトラクターが後ろから追突)があり、追突車両が破損し、被追突車両の搭乗者が腰を負傷した。  <b>【職員向け】</b> (イ) ヒヤリハット事例(発生状況、原因、対策・指導等)の共有ファイルを作成して情報共有した。  (ウ) 刈払機安全研修実施(4月)1回  (エ) 農作業安全指導者研修への参加(6~8月)4名  <b>【学生向け】</b> (オ) 刈払機の安全衛生教育(森林)実施1回 (カ) 伐木等の特別教育(森林)実施1回  (キ) 農業機械研修 刈払機(4月:農食、6月:社会人) 管理機(5月:農食) 運搬車(5月:森林) ホイルローダー(7月:酪肉) 動噴・運搬車(7月:農食)	D (ア) 事故事例を検証し、作業前の装備確認や危険予知を行うなど、農作業事故防止に努める。トラクター操作に関しては、入校案内時にマニュアル免許の取得を推奨するとともに、クラッチ操作の資料を作成し、研修開始時に説明指導の徹底を図る。  <b>【職員向け】</b> (イ) 引き続き、ヒヤリハット事例の情報共有を行う。  (ウ)(エ) 刈払機安全研修は、新任職員必須の研修として毎年実施する。 農作業安全指導者研修(国研修)は、未受講者に必ず受講するよう指導する。  <b>【学生向け】</b> (オ)~(キ) 各コースの状況に応じて、適宜、農業機械研修を実施する。	<b>【委員】</b> 今はVRとかもあるので、そういうものを活用しながら、イメージを持って、ケガや事故に対応できるようにしてもらえるとよい。	
			<b>ウ 課題研究・意見発表等の取組</b> (ア) 全国大会出場 1名以上  (イ) 代表課題発表前指導 2回  (ウ) 関東大会前発表指導 2回  (エ) 全国大会前発表指導 2回  <b>※令和6年度 プロジェクト発表 特別賞「日本農業新聞賞」受賞</b>	(ア) 関東ブロック大会では、課題研究発表に3名が出場し、1位、2位、3位を独占。意見発表でも1名が出場し、1位となった。全国大会には各1名が出場し、課題研究発表(プロジェクト発表)で最優秀賞(農林水産大臣賞)、意見発表で優良賞(全国農業大学校協議会会長賞)を受賞した。  (イ) 代表課題発表前指導 <b>【課題研究(2年生)】</b> 各コースにおいて、計画・中間検討会を開催し、成績概要や発表用資料のブラッシュアップを図った。 <b>【意見発表(1年生)】</b> キャリアデザインⅠで、4~6月に4回、作文指導の講義を行った。また、夏休みの宿題として1人1課題の作文を作成(全員提出)させ、各コースにおいて添削指導した。  上記指導を行ったうえで、校内課題研究発表会(11月26日、27日)を開催し、代表課題研究発表会(12月12日)に出場する代表者(課題研究発表7名、意見発表5名)を選出。発表前指導を2回(12月2日、10日)実施した。  (ウ) 代表課題発表会において、関東大会(1月15、16日)への出場者(課題研究発表3名、意見発表1名)を選出。発表前指導を3回(12月18日、23日、1月13日)実施した。  (エ) 全国大会(2月17~19日)に出場する課題研究発表1名、意見発表1名に対し、発表前指導を1回(2月9日)実施した。	(ア)~(イ) 次年度も全国大会出場に向け、下記の指導を行う。 なお、課題設定の際は、県の政策や地域が抱える問題にも目を向けさせ、必要に応じて関係機関との連携を模索するよう促す。これにより、学生の視野を広げ、課題を把握・解決する能力の習得を目指す。  <b>【課題研究】</b> ①計画検討会(2月~7月) ②中間検討会(9月~11月) ③校内課題研究発表会(11月) 代表課題発表前指導 ④代表課題研究発表会(12月) 関東大会前発表指導 ⑤関東ブロック課題研究発表会(1月) 全国大会前発表指導 ⑥全国発表会・意見発表会(2月)  <b>【意見発表】</b> ①キャリアデザインⅠの講義で作文指導 ②夏休みに1人1課題の作文を作成し、これをもとに意見発表指導 ※その他、課題研究に準じて指導	<b>【委員】</b> 課題研究発表会について、このような取り組みは、本人だけでは良い成果が出ないので、先生方の指導力が実った形だと思ふ。発表は、科学的な根拠を示して説得力のある内容だった。それが素晴らしい成果に結びついた。来年度も期待したい。 若い人が自信を持って表現することは、農業の魅力を多くの人に知ってもらうために、有効ではないか。ぜひ、色々な機会を使って、発表してもらいたい。  <b>【委員】</b> どれも素晴らしい発表で感銘を受けた。先生方のサポートや学生達のやる気が感じられ、すごく勉強しているのだなと感心した。引き続き学生が自信や意欲を持てるような機会を設けてもらいたい。		

【参考】全国大会までの過程



番号	重点方針	現 状	評価項目	取組内容	経過・実績(3月末)	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見(R7年2回目)	
				<b>エ 国際水準のGAPを実践</b> (7) 野菜コースのGAP維持審査 1回  (イ) 農林大GAPの内部審査 1回	(7) ASIAGAPがJGAPと一本化されるため、JGAPで維持審査を受験して認証された。指摘事項を改善し、実習内容に反映した。  (イ) 上記以外では、コース毎に独自基準である農林大GAPを設け、3月に内部審査を実施。校内農業管理規定に基づき、農業等の管理徹底を図った。	A	(7) 引き続き、自己チェック等を行い、改善を進める。  (イ) コース毎に独自基準である農林大GAPを設け、取組計画に基づき、内部審査を実施する。酪農肉牛コース職員は、畜産J-GAP指導員の更新を行い、校内GAPや学生指導に活用する。	<b>【委員】</b> いきなりJGAPだとハードルが高いので、その前段階の仕組みがうまくできればよい。	
				<b>オ 有機農業の担い手育成</b> (7) 「有機農業論」、「循環型農業論」 「おおむね満足」以上 80%以上  ※令和6年度実績 「循環型農業論」86% 「有機農業論」76%  (イ) 社会人コース 「おおむね満足」以上 80%以上  (ウ) 社会人コースの就農率 100%  (エ) 【追加】有機農業交流会の開催	(7) 前期「循環型農業論」の満足度評価 92% 後期「有機農業論」の満足度評価 97% 特に実践農家による講義が好評であった。  (イ)(ウ) 実習、就農支援カリキュラムの充実を図った。コースのアンケート結果 「おおむね満足」以上 88% 社会人コースの就農率 88% (7/8名)見込  (エ) 有機農業を学ぶ学生や卒業生、すでに有機農業を実践している方々の情報交換を行う場を作ることと目的として「有機農業交流会」を開催した。	A	(7)～(ウ)「循環型農業論」「有機農業論」の授業内容をさらに充実(新たな外部講師の発掘など)させる。アンケート結果をフィードバックし、社会人コースへの就農支援の強化を図る。卒業後の就農率100%を目指す。  (エ) 次年度以降も「有機農業交流会」を開催し、情報交換の場を作る。	<b>【委員】</b> 就農支援は色々な助成もあるが、例えば、機械を導入して、効率的にやって、規模拡大していった時に、うまく機械の導入が見込めるような仕組みができればよいと思う。  <b>【委員】</b> 有機農業も素晴らしいが、それとは違う、多様な農業の素晴らしさも、学生達に教えた方が選択肢として広がると思う。  <b>【委員】</b> 有機農業交流会の開催は非常によいと思う。特に、独立するとすると孤立しがちな方もいる。孤立させない繋がりを作っていくのは、卒業した後も心強いのではないかと。	
				<b>カ スマート農林業の実践</b> (7) スマート農林業の機械・施設等の活用 各コース	(7) イノベーションファームでは、野菜コースにおいて8課題の課題研究に取り組み、卒業論文としてまとめた。花き・果樹コースにおいて、「みどり戦略学生チャレンジ」として調査・研究に取り組んでいる。 酪農肉牛コースでは、スマート農業に取り組む業者を講師にドローンや自動操舵システムについて講義を実施した。また、牛のウェアラブルデバイスを乳牛舎に導入し、それに伴う活用に向けた講義をメーカー講師に依頼し実施した。	A	(7) イノベーションファームでは、野菜コースで10課題、花き・果樹コースで5課題の課題研究に取り組む。 酪農肉牛コースでは、導入した牛ウェアラブルデバイスを活用した実習を展開するとともに、新たに分娩監視カメラの導入を進める。 森林コースでは、令和8年度カリキュラムからスマート林業の講義および実習を新たに追加する。		
				<b>キ 六次産業化、実践販売力の強化</b> (7) 特別講演会 1回  (イ) ★粉末化プロジェクトの実行  (ウ) 販売学習 7回  (エ) 有機農産物取扱店での販売	(7) 野菜の粉末化に取り組む企業による講演会(12月12日)、ぐんまちゃん作者 中嶋文子氏によるプロモーション・PR戦略に関する講演(2月20日)を開催した。  (イ) 粉末化機器の導入・活用に向け、対象となる農産物の作付・粉末化の計画を作成して取り組んだ。 低温除湿乾燥庫、凍結乾燥システム等、粉末化に必要な機器を導入し、次年度課題研究に向けた予備試験に使用した。  (ウ) 販売学習 ①花と野菜の即売会の開催(5月9日:校内) ②イオン販売会の開催(6月6日、10月17日、12月5日:イオン高崎) ③ぐんま青空マルシェに出店(5月25日:群馬支所)  (エ) 有機農産物取扱店において有機野菜を6月から週2回(火・金)販売開始した。しかし、収穫減により、9月中旬～10月中旬まで、出荷を一時休止。10月下旬から出荷を再開し、2月末まで出荷を継続した(年間出荷・販売回数:57回)。 また、有機農産物を販売するマルシェ(イオン:10月18、19日、前橋総合運動公園:11月16日)に出店し、農林大学の有機農産物をPRした。	A	(7) 次年度も六次産業化に関する講演会を開催する。  (イ) 次年度課題研究にて本格的に使用するほか、社会人コース等他コースにも加工技術を習得できるようにする。  (ウ) 販売学習 ①販売力強化、販売チャネルの多様化、引き売りの負担軽減のため、校内直売会の開催を検討する。 ②イオン販売会の開催(6月5日、10月16日、12月4日予定) ③ぐんま青空マルシェに出店(年3回)  (エ) 6月～2月まで安定的に有機農産物を出荷できるよう、作付け計画を検討する。マルシェ等に参加し、農林大学の有機農産物をPRする。	<b>【委員】</b> イオンの販売会に3回中2回参加させてもらった。並んでいる間に周りの雑談を聞いていると、農林大の取組が定着していると感じる。農林大の農産物がとても良い、いつも楽しみにしていると言う人が多い。農林大をPRする意味でも大事だと思う。学生にとってもよい体験になる。	

番号	重点方針	現 状	評価項目	取組内容	経過・実績(3月末)	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見(R7年2回目)
				<b>ク デジタル人材の育成</b> (ア) ★民間企業と連携したデータサイエンス関連授業(生成AI等) 1回	(ア) 「生成AI基礎講座」を2年生及び社会人コースの学生向けに開催(11月5日)した。次年度も開催するため、必要な予算措置を行った。	A	(ア) 「生成AI基礎講座」をキャリアデザインⅡの講義として位置づけて開催する。	【委員】 AIの活用は難しいところもあるが、AIにその分野で生徒に伝えるのに面白い話題とか三つ挙げてと聞くと教えてくれる。提案してくれた中から生徒に響きそうなものを授業の最初の掴みのところで使う。そんな使い方もできる。
				<b>ケ プレゼンテーション能力の向上</b> (ア) キャリアデザインⅠによる講義 1年生 (イ) 学年集会時(1分間スピーチ) 3回	(ア) 5月に自己PR、1分間スピーチの演習を行った。  (イ) 7、12、2月の学年集会において、各学年・コース代表者による1分間スピーチを行った。	A	(ア)(イ) 次年度もキャリアデザインⅠの講義において、自己PR演習を行う。また、学年集会(年3回)時に、各コース代表者による1分間スピーチを行う。	
				<b>コ 学業優秀者の表彰</b> (ア) 1年次、2年次、2年間の優秀者表彰	(ア) 1年生は3月18日、2年生は3月19日(卒業式当日)に褒章授与式を開催し、表彰する。	A	(ア) 次年度も3月に褒章授与式を開催し、学業優秀者を表彰する。	
			(3)社会生活の基本を身につける	<b>ア 寮生活を通して規律、協調、思いやりの精神を育む教育の実践</b> (ア) 1年次 全員 (イ) 2年次 原則希望者	(ア)(イ) 5月から7月にかけて、スクールカウンセラーによる新入生面談を実施。また、朝の打ち合わせで各コースへ学生への指導を依頼、学年集会等、機会をとらえ意識喚起してきた。 しかし、以下の違反行為により学生を処分した。  ①寮内で違反行為が発覚。規程に基づき厳正に対処し、2年生4名(うち2名が退寮処分)を処分した。 ②校内における違反行為に対し、学生2名に厳重注意処分を行った。	B	(ア)(イ) 引き続きスピード感を持ち、朝の打ち合わせや学年集会などで、学生の指導を徹底する。寮内での違反行為に関しては、再度、舎監とルールを確認し、指導を徹底する。 また、校門前での交通指導や挨拶運動により、意識向上を図る。	
				<b>イ あいさつ運動の実施</b> (ア) 登校時における玄関前での声かけ	(ア) 登校時における玄関でのあいさつ運動、さらに校門での交通安全指導を実施。	A	(ア) 登校時における玄関でのあいさつ運動、さらに校門での交通安全指導を実施する。	
				<b>ウ メンタルヘルスの実施</b> (ア) 入校後面談(5月) 1年生全員 (イ) スクールカウンセラーの設置 2回/月	(ア) 5月から7月にかけて、スクールカウンセラーによる新入生面談を実施した。  (イ) 延べ13名の学生がスクールカウンセラーによるカウンセリングを利用した。	A	(ア) 次年度も5月から7月にかけて、新入生全員を対象としたスクールカウンセラーによる面談を実施する。 (イ) 次年度も年間22日のスクールカウンセラー来校日設定。一日当たり4コマの枠を設けて学生に周知し、カウンセリングの利用促進を図る。	【委員】 30数年前はスクールカウンセラーとかは無く、大変なこともあった。13人がカウンセリングを受けたことを見ると、良かったのではないかと思う。
				<b>エ マナーアップの促進</b> (ア) マナーアップ講座の開催 1回	(ア) 2月に市内紳士服専門店担当者によるマナーアップ講座を1年生対象に開催した。採用面接時のマナーやスーツの着こなし等を学んだ。	A	(ア) 次年度も市内紳士服専門店担当者によるマナーアップ講座を1年生対象に開催する。	
				<b>オ 生活態度優秀者等の表彰</b> (ア) 1年生 各コース1名	(ア) 舎監推薦及びコース推薦により総合的に決定し、3月18日の褒章授与式にて表彰した。	A	(ア) 次年度も3月に褒章授与式を開催し、生活態度優秀者を表彰する。	
			(4)地域、外部機関との連携	<b>ア 地域との連携、地域貢献等</b> (ア) 箕輪城・芝桜公園の美化 4回 (イ) 地元小学校との交流 1回 (ウ) 地元マルシェ等への出店 3回 (エ) 学校給食への出荷 4品目 (オ) 子ども食堂との連携による食育 随時 ※令和6年度の食材提供 39回	(ア) 箕輪城跡の美化として、5月に花壇苗32鉢、10月に花壇苗550鉢を提供した。また、3月末には芝桜公園に花壇苗4,000鉢を提供した。  (イ) 10月17日に開催された箕輪小学校花いっぱい運動共同作業に、生産した花壇苗1,000鉢を提供するとともに、花き・果樹コース学生が生徒に対してプランターの植え込み指導を行った。  (ウ) くま青空マルシェに出店(5月25日、10月26日、12月14日)  (エ) 箕輪学校給食センターへの出荷(3月末現在:キャベツ1,240kg、ニラ16kg、タマネギ338kg、ネギ68kg、キュウリ50kg)  (オ) 子ども食堂への食材提供 35回	A	(ア) 次年度も実践学習として花壇苗を生産し、提供する。また、芝桜公園用の芝桜苗の栽培方法を課題研究で検討する。  (イ) 次年度も実践学習として花壇苗を生産し、提供するとともに、5～6年生に対してプランターの植え込み指導を実施する。  (ウ) 次年度も年3回開催する予定のマルシェにすべて出店する。また、今年以上の品揃えを目指し、作付計画を立てる。  (エ) 給食センターへの出荷を継続するとともに、多くの品目での利用を働きかける。  (オ) 子ども食堂への食材提供を継続するとともに、多くの品目が提供できるように調整する。	【委員】 地域の連携は大事である。学生達が就農すれば、その地域の方々と連携せざるを得ない。農地がある以上、地域との結びつきは絶対切れない。地元に入ったら、このように地域と連携していくと言うような事例も勉強させてもらえるとよい。

番号	重点方針	現 状	評価項目	取組内容	経過・実績(3月末)	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見(R7年2回目)
				<b>イ 外部機関との連携</b> (7) 高崎健康福祉大学との共同研究  (イ) 東日本調理師専門学校  (ウ) 【追加】カルビーポテト(株)、全農ぐんま等	(7) 酪農肉牛コースでは、課題研究の中で高崎健康福祉大学と機能性成分分析を共同研究で実施。課題研究発表会では、関東ブロック大会で3位入賞となった。 農と食のビジネスコースでは、課題研究に向けて、キャベツとウメ加工品の栄養成分分析を共同研究で実施した。  (イ) 農と食のビジネスコースでは、2月に東日本調理師専門学校にて、農林大産農産物を使用した調理実習を行った。専門学校の学生と一緒に本格的な中国料理を学び、交流することができた。  (ウ) 農と食のビジネスコースでは、「加工用パレイシヨ導入による持続的なコンニャク生産の実現について」と題し、外部機関と連携した課題研究を設定。全国の課題研究発表会で最優秀賞(農林水産大臣賞)を受賞することができた。	A	(7)~(ウ) 次年度の課題研究も必要に応じて外部の関係機関と実施し、学生が一步踏み込んだ課題に取り組める環境を整える。	
				<b>ウ インベーションファームの活用</b> (7) 視察等受け入れ 10回 ※令和6年度は7回延べ79名  (イ) 農業技術センターとの連携による最新技術の実証と普及 3品目	(7) 農林大学校に対する理解促進のため、各種団体、企業、生産者等の視察を受入れた。 15回 延べ203名  (イ) 野菜コースでは、県育成イテゴ新品種に関する課題研究を3課題実施し、卒業論文としてまとめた。 花き・果樹コースでは、中部農業事務所、民間企業と連携して紫外線によるバラ切り花栽培におけるうどんこ病防除の予備調査を実施した。	A	(7) 引き続き視察等の受入を行う。 花き・果樹コースでは、本校ホームページを活用して特徴的な学習や栽培を発信する。  (イ) 野菜コースでは、新たに2課題を設定し、データを収集する。 花き・果樹コースでは、中部農業事務所や民間企業との連携を継続するとともに、バラ栽培における化学農薬50%削減に向けた課題研究を実施する。	
			(5)教育環境の充実	<b>ア ICTを生かした新たな授業方法の展開</b> (7) 高性能林業機械のシミュレーター操作  (イ) ★牛向けウェアラブルデバイスからのデータ活用	(7) 7月と9月に高性能林業機械のシミュレーター操作実施、2月にVRシミュレーターを使った林業労働災害防止講習会を開催した。  (イ) ウェアラブルデバイス(飼養する牛の情報をインターネットでリアルタイムに確認できる機器)は、2月に導入し運用を開始。学生向けにメーカーに講師を依頼し、スマート農業やウェアラブルデバイスの活用方法の講義を実施した。	A	(7) 次年度も7月と9月に高性能林業機械のシミュレーター操作実施、2月にVRシミュレーターを使った林業労働災害防止講習会を開催する。  (イ) 次年度は「分娩監視カメラ」を導入し、遠隔で分娩状況を確認できる体制を整える。ウェアラブルデバイスと組み合わせることにより、職員や学生の牛舎での拘束時間や負担を削減し、スマート農業の実践学習をさらに充実させる。	
				<b>イ 最新作業機械による学習の実践</b> (7) ★自走式飼料収穫調整機械での実習	(7) 新たな汎用型微細断飼料収穫機等を導入し、専門実習で活用を開始した。また、県関係機関を参集した実演会を開催したところ、23名が参加。実演は雨天中止となったが、メーカー担当者から本機の性能や操作性等について説明を受けた。	A	(7) 今後、学生教育の充実と最新技術の実践を目的とし、実習・研修会等で活用するとともに、良質な自給飼料の生産を行っていく。 次年度は、搾乳システムの入替や牛飼養管理に関する作業機械導入を進め、実習環境の改善と安全確保を行いつつ、即戦力となる人材育成に向けて活用する。	
				<b>ウ 快適な学習環境の整備</b> (7) ★現場教室等に空調設備を設置	(7) 野菜コース、花き・果樹コース、社会人コースの現場教室・出荷調整室に空調設備を設置した。酪農肉牛コース、農と食のビジネスコース、森林コース、機械整備舎現場教室は、令和8年度の予算措置を行った。	A	(7) 次年度は、酪農肉牛コース、農と食のビジネスコース、森林コース、機械整備舎の現場教室等で空調設備を設置する。	
				<b>エ キャンパスの環境美化</b> (7) 環境整備の実施 8回	(7) 全校学生による校内の環境整備(清掃、除草、植栽管理)を、5、6、7、9、10、11、12、1月に実施した。	A	(7) 次年度も全校学生による校内環境整備を年8回実施する。	

番号	重点方針	現 状	評価項目	取組内容	経過・実績(3月末)	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見(R7年2回目)	
2	実績の 上がる 学生募集 の実行	1 少子化により減少傾向であった入校生も、HPの更新や学生募集の強化、PRにより令和4年度までは8割程度を確保していた。しかし、令和5年度は6割程度に減少し農業や農林大の魅力を広く知らせる必要がある。 定員100名に対し、平成31年度86名、令和2年度83名、令和3年度78名、令和4年度82名、令和5年度59名、令和6年度59名、令和7年度70名で推移している。  2 近年、非農家出身者が増加しており、令和7年度入校生は80%を占めている。なお、女子学生の割合は、令和7年度は26.%(令和6年度27%)であった。  3 入校生の約6割が農業高校出身者(令和7年度入校生:69%)であり、農業高校との連携とともに普通高校へのPRも積極的に行っている。	(1)入校生の確保	ア 学生募集の強化	(ア) 入校者数 70 → 80名以上	(ア) 入校予定者数 61名(2月末現在) うち県外3名(東京都2名、栃木県1名) ①推薦入試 48名 ②一般入試 13名(うち社会人2名) ③追加入試申込者 8名(うち社会人1名)	B	(ア) 本年度の入校状況等を検証し、次年度に向けた対策を検討する。	【委員】 4年制の大学に行きたがる学生が多いのではないかと。群馬県も4年制大学にしたらどうか。群馬で農業をやる上で、農林大は最高だと思っている。 【回答】 農林大の職員は教員免許を持っていない。4年制の大学にすると講義や研究が主になる。農林大の魅力は実践である。
				(イ) 学生募集プロジェクト会議 2回	(イ) コース長・係長会議において、学生募集やオープンキャンパスの進め方等について協議した。	(イ) 次年度も、農業系高校、進学実績のある高校、新任校長高校を訪問する。また新たに、埼玉県北部と栃木県西部の高校へオープンキャンパスの資料を配付する。			
				(ウ) 高校生・保護者向けPR資料配布 58校	(ウ) 農業系高校(10校)、進学実績のある高校(48校)を訪問し、学校案内等を配布した。また、新任校長訪問(15校)、本校受験の可能性のある埼玉県北部の高校(21校)、栃木県西部の高校(15校)を訪問してPRした。	(ウ) 次年度も、新・農業者フェア(都内2回)、ぐんま就農FEST(県内1回)に参加し、就農を目指す方に入校を呼びかける。			
				(エ) 新・農業者フェア等参加 2回	(エ) 新・農業者フェア(都内:9月と11月)、ぐんま就農FEST2025(Gメッセ:2月)に参加し、就農を目指す方に入校を呼びかけた(9月は6組、11月は13組、2月は38組の相談対応)。	(エ) 次年度も、招かれた高校進路相談会等には、県外も含め可能な限り参加する。			
				(オ) 高校進路説明会への参加 20回	(オ) 高校進路相談会やガイダンスに37回(3月末の予定含)参加し、学生募集した。	(オ) オープンキャンパスを3回開催(7月24日(木)、8月2日(土)、8月30日(土))、★社会人コースのオープンキャンパスも同時開催した。 学生の参加者数 161名	A	(ア) 次年度も学生参加型のオープンキャンパスを開催する。 8月に開催する2回のオープンキャンパスについて、より保護者が参加しやすくなるよう、うち1回を日曜日の開催とする。	
				(イ) 参加者の満足度評価 「おおむね満足」以上 95%以上 ※令和6年度の満足度評価 95%	(イ) 参加者の満足度評価 「おおむね満足」以上 98%				
				ウ 情報発信	(ア) HPの更新回数 100回以上 ※令和6年度更新回数 145回	(ア) HP掲載による情報発信(更新回数77回) ※2月17日現在	B	(ア)~(カ) 情報発信の効果を検証し、次年度の取り組みについて検討する。	【委員】 本校でも今年度からInstagramを始めた。見てくれる方が増えている。高校も少子化の影響で倍率が伸びない。Instagramをやっているようなところは、ある程度倍率があるのかなと、教員が話をしている。ぜひ、あげたらどうか。 高校のSNSは職員が発信をしている。生徒の様子や子牛が生まれましたとか、他愛もないことだが、知ってもらうためにはよい。ハッシュタグの付け方も工夫するとよい。 【回答】 学生からもSNSの方がよいと言う話も聞いている。難しい面もあるが検討したい。高校との連携も重要。学生は先生からの情報が特に参考になったと言っている。
				(イ) 動画配信 10回	(イ) 学校案内と合わせ、各コースの動画開を作成した。				
(ウ) ラジオ放送 1回	(ウ) ラジオ放送の取り組み無し								
(エ) 上毛新聞(県内高校生全員) 1回	(エ) 上毛新聞「みんなの進路」に投稿(タブロイド紙、WEB)								
(オ) 学校案内 3,500部	(オ) 学校案内 本年度の学校案内等に、二次元コードを使い、HPに誘導した。また、次年度の学生募集に向け、学校案内やポスターの作成を開始。掲載する素材や学生候補を選定し、撮影計画等を策定した。	(オ) 本年度の学校案内等に、二次元コードを使い、HPに誘導した。また、次年度の学生募集に向け、学校案内やポスターの作成を開始。掲載する素材や学生候補を選定し、撮影計画等を策定した。							
(カ) ポスター 300部	(カ) ポスター 本年度の学校案内等に、二次元コードを使い、HPに誘導した。また、次年度の学生募集に向け、学校案内やポスターの作成を開始。掲載する素材や学生候補を選定し、撮影計画等を策定した。	【追加】 (キ) 就農支援サイト「ぐんナビ」で学生を募集した。 (ク) 社会人コース座談会「農林大って、思ってたより面白い！」を開催し、HPで掲載した。 ★情報発信の効果検証アンケート(1年生向け)を実施。「何で情報を得たか」、「最も参考になった情報は何か」聞いたところ、オープンキャンパス、ホームページ、学校案内(パンフレット)、学校の先生、家族・親戚、学校の進路ガイダンスが上位となった。							
エ 全寮制に対する不安解消	(ア) 寮生活の紹介 1回	(ア) オープンキャンパスの個別相談で、学生の運営委員が同席し、寮や学校生活の相談にのった。 3月25日、26日に新入生への寮見学会を実施した。	B	(ア) 次年度のオープンキャンパスにおいても、学生運営委員の同席による個別相談ブースを設け、寮生活の不安解消を図る。また、新入生への寮見学会を開催する。					
(イ) 農業高校へOBOG等の派遣 1校	(イ) 3月に勢多農林高校へOB・OGを派遣し、農林大学校をPR予定	(イ) 高校からの要望が少ないため、高校の進路行事に本校学生を派遣できることを周知する。また、「先輩からのメッセージ」を、可能な限り多く配付する。							

番号	重点方針	現 状	評価項目	取組内容	経過・実績(3月末)	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見(R7年2回目)
			(2)農業高校等との連携強化	<b>ア 県内高校への学生募集訪問</b> (7) 高校訪問 県内全校 (イ) 校長・農林部長による訪問 10校 (ウ) 管理職・担当職員による訪問 48校 <b>イ 連携会議等を通じた情報交換 農業高校の担任等へのPR強化</b> (7) 高校教員見学会 1回 (イ) 連携会議 1回 <b>ウ 学校見学会の積極的な受入れ</b> (7) 受入れ 随時 <b>エ 職員派遣講義による高・大連携の強化</b> (7) 職員による出前講義 3回	(7) 担当教授が県内高校のほか、本校受験の可能性がある埼玉県北部の高校(21校)、栃木県西部の高校(15校)を訪問してPRした。 (イ)(ウ) 農業系高校(10校)、進学実績のある高校(48校)を訪問し、学校案内、募集要項、オープンキャンパスチラシを配布した。また、新任校長の高校(15校)を訪問し、理解を求めた。 (7) 6月に高校教員を対象にした校内見学会を開催(参加者19名) (イ) 7月と1月に農業高校と県行政による担い手育成に関する連携会議を開催 (7) 6月に安中総合学園高校、3月に富岡実業高校の農林大見学会を開催。農林大学校の魅力をPRした。 (7) 勢多農林高校で出前講義(森林2回)、富岡実業高校で出前授業(野菜)を実施。伊勢崎興陽高校で林業教室を開催(2回)。玉村高校と吾妻中央高校の進路ガイダンスに参加し、花き実習体験を実施。	A A A A	(7) 次年度も、校長・農林部長による農業系高校訪問、管理職・担当職員による進学実績のある高校訪問、担当職員による新任校長の高校訪問を実施する。 また、本年度の取り組みの効果を検証し、隣接県高校の訪問について検討する。 (7)(イ) 次年度も、高校教員対象の農林大見学会、農業高校と県行政の連携会議を実施する。 (7) 次年度も、高校からの要望に基づいた農林大見学会を受け入れる。また、そのことを高校側にも周知する。 (7) 次年度も、派遣講義内容を県下全ての高校に周知し、要望に応じて職員を派遣する。より魅力的な講義内容を検討する。	
3	<b>実績の上がる進路指導の実行</b> 1 キャリアデザインⅠ・Ⅱ(共通専門) 1年次は多様な講義・演習を通じて社会で働くための基礎的な知識を習得する。2年次は就農・就職等の希望する進路に合わせた班別講義・演習等を通じて進路決定のためのスキルアップを図る。 2 先進農林家等体験学習 1年次の3月～2年次の9月の期間、26日間の体験学習を通じて、就農・就職(林業)のマッチングをねらう。 3 就職試験受験報告書の作成 4 就職試験直前模擬面接の実施 希望する学生に対し、校長等が面接官となり面接指導等を行う。 5 編入学ガイダンス 就農班: 就農計画作成、資金計画 農業共済制度、県就農支援対策 農業実践者等の講義、就職相談等 就職班: 就職活動の心構え、面接・グループ討論演習、プレゼンテーション演習等 ※令和6年度進路(卒業生61名)の内訳 就農(雇用就農含む): 19名(31%) JA等農林業関係団体: 10名(16%) 民間企業: 21名(34%) 公務員: 8名(13%) 進 学: 2名(3%) ※就農率:(農林コース除く)31%、 うち雇用就農率47% 林業就業率: 17%	<b>【1年生】(1)進路希望の把握と進路指導体制の強化</b> <b>ア 進路方向の決定と進路別指導</b> (7) 三者面談 1回 (イ) 進路希望調査 2回 <b>イ 進路ガイダンスによる指導</b> (7) 編入学指導 随時 (イ) 進路ガイダンス 1回 <b>ウ 就農・就業の促進</b> (7) 学内企業説明会 1回 (イ) 進路内定者報告会 1回 (ウ) ★3年後の離職率の調査 1回 (エ) ★農業人材紹介企業との連携 1回 <b>エ 就農・就業(林業)への支援</b> (7) 先進地等農林家体験学習 2年生・社会人コース 全員修了 1年生 体験学習先の決定 (イ) 体験学習発表会 各コース1回	(7)(イ) 各コースで12月～3月に三者面談を実施。12月と2月に進路希望調査を実施した。 (7) 5月に編入学ガイダンスを開催。編入学指導を2名にのべ4回実施した。 12月の進路ガイダンスにて、2年生の編入合格者が1年生の編入希望者にアドバイスを行った。 (イ) 12月と2月に進路ガイダンス(ハローワーク講師による講演)を開催した。12月のガイダンスでは、進路内定者報告会(2年生代表による報告)も同日開催 (7) 7月に学内企業説明会(県内外の企業、関東森林管理局の計16社)を開催した。1年生62名と2年生4名(就職先未定の希望者)が参加。企業毎にブースを設け、1人2～3企業の説明を受けた。 (イ) 12月に進路内定者報告会(2年生代表者による報告)を開催し、1年生の進路方向の決定を促した。 (ウ) 3年後の離職率の調査を実施 (エ) 学内企業説明会において、農業に特化した求人情報サイトを運営している企業と連携し、農業の業種ごとの特色等について情報提供を行った。これにより、学生に幅広い選択肢を示すことができた。 (7) 2年生・社会人コース全員が体験学習を修了。 また、1年生全員の体験学習先が決定。3月に合同開講式を行い、順次体験学習を開始した。 (イ) 10月～、各コースにおいて、体験学習報告会を開催(野菜11月12日、花き・果樹10月6日、酪農肉牛10月22日、社会人2月12日、農食10月7日、森林10月8日)	A A A A A A	(7)(イ) 今後、進路希望に応じた指導を行う。随時、内定状況を把握し、進路指導にいかす。 (7) 次年度も5月に編入学ガイダンスを開催し、編入学に向けて早めに準備するよう指導する。 2年生に対する指導は下記に記載 (イ) 次年度も12月から進路ガイダンスを開催し、就職活動への意識を高める。 (7) 次年度も7月の早い段階で学内企業説明会を実施する。今年度の説明会の状況や企業への就職実績、3年後の離職率等を踏まえ、企業を選定する。 (イ) 12月に進路内定者報告会(2年生代表者による報告)を開催。1年生の進路方向の決定を促す。 (ウ) 3年後の離職率の調査を実施し、次年度の学内企業説明会の企業選定にいかす。 (エ) 学内企業説明会において、農業に特化した求人情報サイトを運営している企業と連携し、農業の業種ごとの特色等について情報提供を実施する。 (7)(イ) 次年度の社会人コースは7月下旬までに体験学習先を決定する。 随時、経過を確認し、体験学習が計画的に進められるように指導する。 終了後は、1年生の体験学習先選定の参考となるよう、体験学習発表会を開催する。			



番号	重点方針	現 状	評価項目	取組内容	経過・実績(3月末)	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見(R7年2回目)
				(オ) 毒物劇物取扱者 30%以上 (カ) 狩猟免許(わな猟) 100% (キ) 簿記能力検定3級 60%以上 (ク) 土壤医検定3級 50%以上 (ケ) 有機JAS講習 100%	(オ) 応用科学Ⅱ(希望者受講)において、資格取得に必要な講義と試験対策を行った。 毒物劇物取扱者合格率 50% 受験者4名中 2名合格 (カ) 鳥獣被害対策(1年生前期)において、鳥獣捕獲等に関する基礎知識について講義した。 狩猟免許(わな猟)合格率 100% 受験者2名中 2名合格 (キ) 簿記論(1年生後期)において、資格取得に必要な講義と試験対策を行った。 簿記能力検定3級合格率 71% 受験者38名中 27名合格 (ク) ★土壤肥料学の講義内容を、土壤医検定の取得に向けた内容に変更して対応した。2月に実施された土壤医検定には、3級は6名、2級は2名が受検した(合格発表3月25日)。 (ケ) 有機農業論の講義の中で、有機JAS講習を実施した(全4回)。受講学生45名が全員修了した。			
4	<b>県民の期待に応えられる研修の実行</b>	1 ぐんま農業実践学校(R7年度定員:99名) 新たに農業を始める人などを対象に、野菜栽培の基本技術等の習得を支援する。 2 農業機械研修 免許取得研修(大型トラクター基礎・けん引研修)、トラクター作業機研修、農業機械安全利用研修、農業機械整備研修、運転技能研修(共催)を実施。延べ900名以上の学生や農業者が受講予定。 3 「農と食のふれあい講座」(公開講座) 一般県民を対象に、農林業への理解や親しみを持ってもらうため、農産加工、野菜、花、果樹の栽培技術や農業機械の取り扱い、農産加工に関する講座を計8回開催予定。 有機農業の学習として全国的にも注目されている『菌ちゃん農法』による高畝づくり講座を計3回開催予定。	<b>(1)多様な研修ニーズに対応した「ぐんま農業実践学校」の運営</b>	<b>ア 研修生の確保やニーズに対応した授業内容の充実</b> (7) 研修生の定員確保 100%	令和8年3月末現在実績 (ア) R7研修生の定員確保 110% (入校者109名/定員99名) 野菜専門技術コース 75%(15名/20名) 有機農業コース 90%(18名/20名) 野菜基礎技術コース(春夏) 100%(22名/22名) 野菜基礎技術コース(秋冬) 100%(22名/22名) いちごコース 260%(13名/5名) トラクター操作講座 190%(19名/10名) 定員確保に向けた新規の取組みとして、申込みの利便性向上(入校申込書の変更、記入例の作成、Web申込の開始)、広報力の強化(ダイレクトメール、ぐんナビ・県庁ポータル・群馬県インスタグラムに掲載)などを行った。		(イ) さらにる広報の強化(募集開始の前倒し、市町村広報・JA広報誌などへの掲載依頼など)を検討する。定員割れのコースは、アンケート調査などにより原因を明らかにし、開催内容の改善を検討する。	<b>【委員】</b> 実践学校の方たちには、経営の学びの場はあるのか。 <b>【回答】</b> 野菜専門技術コースは年間70回あるので、経営についても触れる。経営計画を作成してもらって、最後に発表してもらおう。他のコースについては、そこまでの日数が無いのでやっていない。 <b>【委員】</b> 自分から情報を取りに行かないと得られなかったりすることもあるので、こういう学びに来ている人達には情報が伝わると、より現実に農業をやってもらえると思う。
				(イ) 修了時の就農予定率 野菜専門技術コース 100% 実践学校全体(いちごコース除く) 90% (ウ) 修了3年後の農業従事率 R4年度修了生の農業従事率 80% <b>※R3年度修了生の農業従事率 64%</b> (エ) 有機農業アドバイザーの招聘 (オ) 電子メールによる連絡体制の整備	(イ) 修了時アンケートで「すでに就農、数年以内に就農、未定だが就農するつもりである」の割合 野菜専門技術コース 3月13日にアンケート実施 有機農業コース 100% 野菜基礎技術コース(春夏) 100% 野菜基礎技術コース(秋冬) 95% (ウ) 修了3年後の農業従事率 R4年度修了生の農業従事率 75% (エ) 有機農業アドバイザー(くらぶ草の会、佐藤氏)の招聘により、有機農業コースにおける研修内容の充実を図った。 (オ) 有機農業コースではLINEのオープンチャット、いちごコースでは電子メールによる連絡体制を整備し、情報提供・連絡・アンケート調査などに利用した。	B	(イ) 研修生が順調に就農できるように、実践的な内容を充実する。具体的には農業・土壤肥料の講義の強化、機械研修の充実、テキスト(野菜栽培便利帳)の改訂などに取り組む。 (ウ) 同上 (エ) 継続して実施するとともに、有機アドバイザーによる有機農業コースでの特別講義を増やし、さらなる研修の充実を図る。 (オ) 引き続き電子メールによる連絡体制の整備を強化し、情報提供を行うとともに業務の効率化を進める。	

